

「アンモナイトを削る(1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

1、石へのあこがれ

2年生を担任した時、授業で少し石の話をしました。

T「石には全部なまえがついているんだよ。」
C「え～、じゃあ、そのへんに落ちている石も、全部なまえがあるの？」
C「先生は石のなまえがわかるんですか？」
C「持ってきたら、教えてくださいませんか？」
T「う～ん、わかるものとわからないものがあるけどね・・・」

翌日からもう大変。石(石じゃないものも含む)を持った子ども達で、休み時間に大行列になったのです。私が職員室から帰ってくると、開店前の人気ラーメン屋のようになっていました。子ども達は、すべての石になまえがあるという事実に、非常に興味を持ったようです。

砂岩、泥岩、シルト、石英、溶岩、花崗岩、それに各種の結晶片岩がほとんどでしたが、石ではないものもたくさんありました。コンクリートのかけら、煉瓦のかけら、ゴムや木片までありました。しかしこの現象から、冷たく動きもしない石というものに、子ども達が非常に興味を示すことがわかりました。簡単に言えば、子どもはすごく石が好きなんですね。

【2年生の絵日記】

・「田中せんせいに、石のなまえをききました。このあいだかわらでひろった石は、りょくめいへんがん(緑泥片岩)と、クローモへんがん(黒雲母片岩)でした。なまえがわかってよかったです。」

*めずらしい(実際は珍しくないが)石をひろえてよかったですね。またかわらで、いろいろな石をひろってください。(教師返事)

・「ライオン土ようび(第四土曜日)にとでん(都電)のふみきりでひろった石のなまえがわかりました。ほるんへるす(ホルンフェルス)でした。とでんには石がたくさんあるので、全ぶおしえてほしいです。」

*せんろで石をひろうのはあぶないので、やめましょう。

2、化石は特別な存在

石の中でも、化石は子どもにとって特別な存在です。地質時代の生き物が、どのように石の中に残るのか、その過程は別として、化石が生命の痕跡でありそれが貴重なものである、ということは、2年生の子どもでもわかるのです。

化石の中でも特に人気があるのがアンモナイトです。アンモナイトというのは一つの種ではなく、アンモナイト亜綱(*Ammonoidea*)に属する頭足類古生物(イカの仲間)の総称です。時代によって実に多種多様で、その産出量の多さ、産出地域の広汎さから見ても、中生代(正確には古生代末期～新生代初期)に、全地球で異常とも言える大繁栄をとげていたことがわかります。私は特に、白亜紀後期の「異常巻きアンモナイト」のコレクションをしています。

【2年生の絵日記】

・「かはく(国立科学博物館)で、アンモナイトのか石をかってもらいました。ほしいのが二こあったけど、一こ千二百円もするので、一こしかかってもらえませんでした。つくえの上にかざったら、はくぶつかんみたいでした。かわなかったほうのアンモナイトは、ばい店にのこって、さみしいでしょうね。」



私の「異常巻きアンモナイト」のコレクション

(左上) 通常のアンモナイト。イングランド産。

(右上) ポリプチコセラス。北海道産。「つ」の字型に何度も屈折します。

(左下) バキュリテス。ドイツ産。巻を完全に失い、まっすぐな棒状になったアンモナイト。

(右下) ニッポニテス。最も複雑な異常巻きアンモナイト。北海道産のレプリカ(実物を借りて自分で作成)。